

帰荘の文学思想：錢謙益からの師承について

藤井，良雄

<https://doi.org/10.15017/2332680>

出版情報：文學研究. 78, pp.85-111, 1981-02-28. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

歸莊の文学思想

— 錢謙益からの師承について —

藤 井 良 雄

歸莊、字は爾禮また玄恭ともいう。明清鼎革の乙酉の年（一六四五）以後、歸祚明と名のる。祚明とは「明に祚あれ」（Long live the Ming Dynasty）という意味である。それ以後、歸藏、歸乎來と稱し、歸妹とも懸弓とも自署し、あるいは園公、元公、恆軒とも号し、また元功と題し己齋とも号した。乙酉の変において、故郷崑山の抗清起義に参加して敗れ、僧装となって逃走するときには、普明頭陀と稱した。さらに、圓照あるいは鑿鑿鉅山人とも署し、逸羣公子とも稱したという。歸莊が稱した名の多さからでも、彼が動乱の時代に生を享けたことが察せられる。彼は明末萬曆四十一年（一六一三）に生れ、清初康熙十二年（一六七三）に卒しているが、その間明朝滅亡後三十三年の遺民の生涯を遂げたのである。若年十七歳にして復社に入り、「歸奇顧怪」と目され顧炎武（一六一三—一八二）と名を斉しくした歸莊が後世より評価されるのも、顧氏と同じく、遺民の生涯を全うしたからであろう。そして、『歸莊集』の出版説明によれば、歸莊の残した詩文は、国を愛する思想と民族の気節に満ちている。彼は沉鬱悲愴なタッチで清軍の血腥い残虐行為をあばき出し、国家滅亡一家没落の悲痛を訴え、降清した貳臣に情容赦のない鞭撻と諷刺を加えた。とりわけ甲申、乙酉のとき作られた詩篇は、この大動乱時代の政治のすがたを反映し、相当の史料的价值を具有

している。彼の詩歌の大半は、胸臆を直抒し、雕琢を事とせず、明人の模擬の習気がなく、彼の国を憂え時を傷む情感を痛快に表現できた。歸莊の散文は、意気雄渾で、筆力充分で、彼の故国に思いをはせる痛みと世を憤り俗をにくむ思想を同じように表現した。文集中、「送顧寧人北遊序」「與季滄葦書」「答汪茗文書」「兩顧君大鴻仲熊傳」などは比較的成功した作品である。題面の短い跋や肖像面の題贊中にも、少ない語数ながら、作者歸莊の兀然不俗の形象と堅固不拔の節操を記し、かなり高い思想性と芸術的成果を具えている、と説明されるのも、まずは肯定できるものである。しかしながら、この説明も、「看花雜詠」「山遊詩」や多くの詩序・壽序等がかなりの部分を占める歸莊の詩文を覆うものとは認めがたい。散文の中ではこれら「序」の文章に、歸莊の文学思想を開陳しているものが多いからである。ここに論者が指摘する「看花雜詠」「山遊詩」の詩と「看牡丹記」「尋菊記」「看寒花日記」「觀梅日記」「看桂花記」や「壽序」等の散文は、顧炎武が『日知録』の中で「一たび号せられて文人と為らば、觀るに足る無し」と非難する「文人」的な歸莊の所作である。また、前に紹介した出版説明が列挙する諸作品は、顧炎武が主張する「文須有益於天下」に沿った士大夫としての正統的なもう一面を持つ歸莊の作品である。歸莊の文学には文学放蕩的な文人としての側面と、政治的正統的な士大夫としての側面が存在する。その二面の統合体が歸莊であったといえる。

さて、論者は歸莊の文学の思想を解明するために、歸莊における師弟の問題から稿を起し、その師錢謙益から何を師承したかを考究して、歸莊の文学思想において錢謙益の強い影響を考察する。これまで、歸莊の文学に関する専論は我国ではほとんどなされていないので、本稿が歸莊の文学を研究するための一視座を設定することができれば幸いである。

歸莊と顧炎武は同年齡であつて、この兩人は、崇禎二年（一六二九）に張溥が盟主となつて旗上げをした復社に、その成立とはほとんど同時期に入つている。それ以後、兩人が生涯無二の友となるのは、歸莊が後に「送顧寧人北遊序」の中で「余と寧人との交わり、二十五年なり。」といつてゐること、その顧炎武の北遊時期が彼の四十五歳のとき（一六五七）であつたこと等から逆算して、おおむね兩人の二十歳ごろからであつたことになる。それは二人が復社に入つてから三年以後のことである。この当時からすでに「帰奇顧怪」の評判があつたのであろう。

復社は張溥（一六〇二—一四一）が各文社を統合して、世を憂える士大夫たちの力を結集するために盟を結んだ結社である。

世教の衰へしより、士子は經術に通ぜず。但だ耳を剽り目を絵どり、有司に弋獲さるるを幾幸するのみ。明堂に登るも君に致す能はず、郡邑に長たるも民を澤するを知らず。人才日に下り、吏治日に偷きは、皆此に由る。

溥、徳を度らず、力を量らざるも、四方の多士と共に古学を興復し、將に異日の者をして務めて有用為らしめんことを期し、因りて名づけて復社という。（陸世儀「復社紀略」卷一）⁶

この張溥の言から判明するごとく、復社設立の趣旨は、「古学を興復し、務めて有用たらんとす」ることであり、後に黄宗羲や顧炎武が提唱する「經世致用」と軌を一にしたものである。そして、復社の士大夫たちは、次に掲げる「盟詞」⁷を遵守して、互いに切磋琢磨したのである。

学、殖せざれば將に落ちんとす、彝に匪ざるを踏む母れ、聖書に匪ざるを読む母れ、老成人に違ふこと母れ、己の長ずるを矜ること母れ、彼の短を形わすこと母れ、辯を以て政を亂すこと母れ、進むを干めて乃の身を喪ふ母

れ。今を嗣ぐに往を以てし、犯す者小さければ諫を用ひ、大なる者は擯けよ。

ところで、張溥について歸莊自身は、「莊は生平經術には則ち故翰林張（溥）天如先生を師とするも、遊に従ふの時晩きを以て、未だ其の精を窺ふを得ず」（與某侍郎）と言ひ、張溥を自分の「經術」の師とは認めてはいるものの私淑するところは「經術」方面だけでそれも深くはない。歸莊は、文学の師は他に求めていたのである。「與某侍郎」という文章で次のように述べている。

古は学に必ず師有り、師に必ず專家有り。經術は則ち鄭玄・盧植、馬季長を師とす。詩賦は則ち宋玉・唐勒・景差、屈原を師とす。理学は則ち桓譚・侯芭、揚子雲を師とし、董嘗・程元は王仲淹を師とす。韓退之は文章の士を以て顔を抗げて天下の師と爲り、李翱・張籍の輩、才は人に過ぐるも、皆之れに従ひて遊ぶ。退之猶ほ師説を作り、當世の学士を譏りて、巫醫に之れ若かずと謂ふ。豈に其の事を習ひ其の学を爲す者、其の淵源を授受するに、誣ふべからざる者有るに非ずや。今の師を求むる者是に異なる。一孝廉・秀才の名聲有りて、能く游揚し汲引すれば、則ち群して之に北面す。考廉・秀才、又薦紳の能く聲援を爲す者を選べば、則ち其の行誼の何等なるかを問わずして、亦た従ひて之に北面す。是れを以て人に誇りて曰く「某大人某先生は我が師なり。」と。試に問ふに「何の専家に学べるか。」を以てす。將に辭を置く能はざれば、蓋し彼の北面する所の者は、某先生、某大人のみ。所謂經術・詩賦・理学・文章、固より知らざるなり。是に於て一書生には必ず教師有り、一人先生には必ず数十百の門人有り、賢愚臧否し、彼此相ひ蒙す。故に豪傑の士は、決して妄に體を人に屈せず、亦た當に濫りに師名を受くべからざるなり。今莊の閣下に於けるや實は北面して相ひ師とするを願ふ。……願るに今天下文を能くする者少からず、莊は他人を師とするを願わず、必ず閣下を以て歸する者と爲すは故有り。閣下の文、莊未だ全集を讀まずと雖も、時に一二を見、則ち竊かに歎じて以爲らく此れ歐陽氷叔の文なりと。又閣下本朝に於いて極めて先太僕（歸震川）を推すを見る。先太僕の文、其の源は固より歐陽氏に出づ。然らば則ち先太僕は

歐陽を師とし、閣下は歐陽を師として尚ほ先太僕を友とするなり。

まずこの文章の題名である「與某侍郎」の某侍郎とは誰のことであらうか。この文中にはすでに見たごとく「故張天如先生」とあるので、張天如すなわち張溥の死（一六四一年）より後に草された文章である。遺民であった歸莊が「又見閣下於本朝極推先太僕」と「本朝に於いて」と言うのであるから、「本朝」が明朝を指している時期で、明末から清のごく初めである。この時期「侍郎」の官名で呼ばれてもおかしくないのは、錢謙益である。錢謙益は、崇禎元年に、詹事から礼部右侍郎に進んでおり、その年には、復社の推す内閣閣僚の主班として、「首相のもっとも有力な候補者として、自他ともにゆるした。しかし選考のための御前会議の当日、温体仁の不意うちの発言によって形態は一転し、入閣の希望を達しなかつたばかりか、『蓋世の神奸、朋党の巨魁』として、再び官吏の身分をうばわれ、裁判を受けることとなった。いわゆる『閣訟』である。翌崇禎二年、一応無罪となったが、その六月には、孤影悄然として四たび常熟に帰った。在朝一年有余であり、第四の挫折である。以後、失意の家居、七年に満ちたが、崇禎九年五十五歳の冬、郷里の無頼から、土豪劣紳として告発され、翌十年、北京の刑部の獄につながれた。……在獄一年有余のち、十一年の秋、釈放されて南へ帰ったが、中央への道はいよいよ遠くなった。第五の挫折である。のち六年、六十三歳、崇禎十七年三月に於ける北京政府の李自成による滅亡のち、南京の弘光帝の小朝廷の礼部尚書となったことは、はじめに述べたごとくであるが、翌年五月、南京の陥落にさいし、まっさきに満洲軍に降ったのは、彼であった。第六の挫折である。満洲に降った彼は、北京の満洲政府に拉致され、その礼部右侍郎として、秘書院の事を管し、『明史』の副総裁に充てられたが、在職数月、一六四六、すなわち清の順治三年六月には、病気を理由に郷に帰り、康熙三年、一六六四、八十三歳の死に至るまで再び出なかつた。その間にも、順治四年から六年まで黄毓祺の抵抗事件に連坐して、南京の獄につながれるということがあった。第七の挫折である。」（吉川幸次郎「錢謙益と東林」）ここに、指摘されるように、錢謙益は、明朝の官吏としては、南京の朱由崧の朝廷の礼部尚書として終り、官名では

錢宗伯と呼ばれるのが普通である。しかし、歸莊は、「侍郎」と呼んでいるので、清朝に降った後の錢謙益の官名で呼んだわけである。というのは、明の崇禎初年錢謙益が同じく侍郎であった時には、歸莊はまだ十四歳であまりにも若年過ぎ、このような文章が書けるまでの文章力がなかったとみるからである。それ故、以下この書の内容の点から推しても、これが錢謙益に宛てて出されたものと判明する。さらに、「閣下」が「極推先太僕」としていることから裏付けられる。錢謙益は、その友人黃宗羲から「文章の壇坫を主づること五十年、幾んど弇州（王世貞）と相上下す」（「思舊録」）と回想されるように、古文辭の指導者として文壇の首座を占めた王世貞に対し、それ以後、すなわち明末清初の文壇を主宰し、古文辭派の命脈を断ち切らんとしたのが錢謙益であった。その錢謙益も若年のころは、やはり古文辭に傾倒し、李夢陽や王世貞の文集を暗誦できたという（「容山陰伯調書」）。ところが、錢謙益は科擧の際、南京に赴いた時、郷里常塾の隣県嘉定から来た人李流芳から「唐宋の大家が李王の文章とはるかに異なるとする説をきき、心が動いた。」⁽⁹⁾といわれる。この後、歸有光の弟子と会った折「歸熙甫（有光）の緒言と、近代剽賊顧質の病とを聞くを得たり。」という。これをきっかけとして、錢謙益は歸有光を慕うようになり大いに歸震川の文章を顕彰したのである。また、歸莊が錢謙益のところへ歸有光の蔵本を借りて赴いた際にも、錢氏は歸莊に対して、

汝の曾祖の文章、唐宋八家に継ぐ可し。顧だ尽くは世に流伝せず。吾は諸刻本と未刻の者とを以て合して之を録せんと欲するも、今窮老にして力無し。他日汝輩の事なり。（歸莊「書先太僕全集後」）

と述べて、錢謙益が歸有光全集の出版のことを、その曾孫で自分の弟子ともいふべき歸莊に託したと言えよう。

歸莊は、「牧齋の晩年の弟子⁽¹⁰⁾」であるとされるが、この「與某侍郎」の文章以後、歸莊が錢謙益の門をたいたとみるべきである。錢氏が清朝の礼部侍郎であった時期は、一六四五年後半から一六四六年前半のわずか数カ月であり、清代になってからも錢氏を錢宗伯と呼ぶのが普通であることを考慮すれば、歸莊が「與某侍郎」と題した文章は、まさにこの数カ月に作られたものと考えられる。論者は、この「與某侍郎」という文章を以て、錢謙益と歸莊の

師承關係が開始されたとみる。そして、この關係は、次章に於いて追究するごとく、錢謙益が卒するまで続く。以下、歸莊から錢氏へ向けて草された詩文の編年表を示しておく。

○壽錢牧齋先生三十六韻 代兄爾復 (二六四一)

○與某侍郎 (二六四七)

○上錢牧齋書 (二六五三)

○某先生八十壽序 (二六六一)

○祭牧齋先生文 (二六六四)

ただし、これを見れば「與某侍郎」より以前すでに、歸莊は「叔兄爾復」に代わってではあるが、錢謙益の長壽を祝するために作った壽詩があり、文壇の大御所に対しての敬念のみならず、ありふれた壽詩の定例とはちがい、「爲公毅平生」として錢氏の身の上に立ち入った話を三十六韻にもわたって詠っている。この壽詩は決して儀礼的なものだけを内容とはしていないのである。

峨峨高山石 峨峨たり高山の石

鬱鬱歲寒柏 鬱鬱たり歲寒の柏

石懷作磧姿 石は礪の資と作るを懷ひ

柏材中尋尺 柏材は尋尺に中る

南国生重器 南国 重器を生じ

大年自天錫 大年 天錫による

公以文章顯 公は文章を以て顯はれ

方壯名赫赫 方に壯んにして名は赫赫たり

奉命較越士

命を奉じて越の士より較あきらなり

甄採多良璧

甄採には良璧多し

貂璫屬構難

貂璫たま屬たま難を構へ

同朝恣排擊

同朝 恣まに排擊す

黨錮局已成

黨錮 局已に成り

清流禍方劇

清流 禍方に劇し

欲罪其無辭

罪せんと欲するも其れ辭無く

悼頭甘削跡

頭を掉りて削跡に甘んず

新朝初賜環

新朝初めて環を賜ひ

澄清爲己責

澄清 己が責と爲す

恢奇勵志氣

恢奇にして志氣を勵まし

慷慨披肝膈

慷慨して肝膈を披く

朋黨非所諱

朋黨 諱む所に非ず

官僚自夷跖

官僚 自ら(伯)夷と(盜)跖

四方仰風采

四方風采を仰ぎ

天子虛揆席

天子揆席を虚しくす

僉人相傾軋

僉人相ひ傾軋し

倉卒挺矛戟

倉卒として矛戟を挺す

浮雲蔽陽暉

浮雲 陽暉を蔽ひ

雨露成霹靂

雨露 霹靂を成す

一蹶遂十年

一たび蹶れて遂に十年

仕路久乖隔

仕路久しく乖隔す

高臥謝安居

高く臥す 謝安の居

著書揚雄宅

書を著はす 揚雄の宅

尺蠖敢求伸

尺蠖敢へて伸びんことを求めんや

庶曰無禍譴

禍譴無しと曰ふに庶し

豺狼既當道

豺狼既に道に當たり

草間生虺蜴

草間に虺蜴を生ず

陷穽非尋常

陷穽尋常に非ずして

狂豨自夙昔

狂豨夙昔よりす

哲人念劬勞

哲人には劬勞を念ひ

前聖厚清白

前聖には清白を厚うす

神明之所助

神明の助くる所にして

天心竟回易

天心竟に回易せり

一朝誅羣兇

一朝 羣兇を誅し

恩命猶斬惜

恩命猶ほ斬惜む

將以老其才

將に以て其の才に老めんとす

公今已耆碩

公今已に耆碩たり

策名三十載

策名三十載

憂危甚福澤

憂危甚だ福澤

太行與瞿塘

太行と瞿塘と

一身飽所歷

一身歴る所に飽く

聲名李杜齊

聲名 李杜と齊しく

文章燕許敵

文章 燕許に敵ふ

姚崇工救時

姚崇時を救ふに工みにして

王珪善揚激

王珪揚激を善くす

國運當昇平

國運昇平に當り

公豈山中客

公豈に山中の客たらんや

惟公重聲氣

惟だ公聲氣を重んじ

終始敦蘭藉

終始蘭藉に敦し

吾父稱久交

吾が父久交を稱するも

衰年愧疎遜

衰年疎遜を愧ず

某也辱顧盼

某や顧盼を辱うし

驚蹇賴驅策

驚蹇 驅策に頼る

今世重覽揆

今世覽揆を重んじ

拜賀通疎戚

賀を拜して疎戚に通ず

堂上斟兕觥

堂上 兕觥を斟り

堂下傾餘瀝 堂下 餘瀝を傾く

恆人祈壽考 恆人 壽考を祈り

君子頌聲蹟 君子 聲蹟を頌す

爲公敘平生 公の爲に平生を敘し

他年光史冊 他年史冊に光かん

この詩には、先に引用したごとく、故吉川氏が指摘する「牧齋の一生は、挫折の連続である」その「挫折」が、錢謙益の「平生」のなかで歸莊によって詠われたのである。この詩の末部に「吾父稱久交 衰年愧疎逖 某也辱顧盼 驚蹇賴驅策」と詠うごとく、若かりし歸莊と錢氏との間には、その父を介してすでに交友關係が存在していたのである。因みに、歸莊の父昌世と錢氏について言えば、錢氏の弟子瞿式耜（一五九〇—一六五〇）が編集し、一六四四年に刊行された『牧齋初學集』百十卷の卷八三に見える次の文章を読めば、錢氏と歸氏の交友が、歸有光全集を出版するという共通の目的を有して並ならぬものであったと推察できる。

歸熙甫先生文集、昆山・嘗熟に皆刻有り。亦た皆備ふ能はず。…余は熙甫の孫昌世と互相に搜訪し、其の遺文若干篇を得たり。槧本に較べて十の五多くして誤れる者は芟とぎ去る。是に於いて熙甫一家の文章粲然たり。（錢謙

益「題歸太僕文集」）

ここに名に見える歸昌世、字文休が歸莊の父であり、『蘇州府志』⁽¹¹⁾に、「甲申の變に、昌世行歌し野に哭す、未だ幾ばくならずして病を發して卒す。」と記され、また錢謙益の「歸文休墓誌銘」によれば翌乙酉の年、「文休、弘光元年九月四日を以て卒す、年七十有二なり。」⁽¹²⁾という。そして、その墓誌を草したのが錢謙益であった。

錢謙益は、乙酉（一六四五）の変の際、南京陥落時に逸早く清軍に降表を奉じて身を翻し、その節操無き行動は心ある人々から非難されるごとく、彼の生涯の汚点となっている。この点については、歸莊も「難壬」と題する文章中で「甲」という匿名によって一応は彼を批判している。

甲乙丙丁戊五人は、皆東南之士、文章を以て時に著稱せられ、而して甲は之れが宗主たり。……甲の出處の大節は、之れを愛する者も之れが爲めに諱む能はざるも、其の文章に至りては、豈に輕がるしく訾議を加ふべけんや。其の篇篇皆盡く善しと謂ふに非ず。……之を要するに手筆の大、学力の到は、百年以來、実に其の匹ひなし。

因みに、この「壬を難ず」という文章は、鄧之誠「清詩紀事初編」⁽³⁾に、

雜著中の「難壬」は、吳修齡の徐乾学兄弟に依倚して、「正錢」を作りて以て謙益を詆るを謂ふ。唯だ莊のみ之を罵らず。

と指摘するのを参考にすれば、壬とは「圍爐詩話」を撰した吳喬、字修齡のことで、壬を非難して、甲すなわち錢謙益を擁護する性質の文章なのである。この「難壬」中には、「甲」という匿名ではあるが、錢謙益の「出處の大節」に言及しながらも、彼の「手筆」すすなわち文学の技倆のみならず、その「学力」も讃えていることが判明する。

前章に引用した黄宗羲の言のごとく、錢謙益は王世貞の亡きあと、明末の文壇の主宰者であり、その地位は清朝に投降した後も変わらなかつた。明清鼎革の際の錢氏の節操は、多くの物議を引き起し、吳喬のごとく罵る者や錢謙益の「文筆」「学力」は認めながらも、錢氏嫌いとなる者——例えば顧炎武——が現われるのは致し方のないことであ

った。ならば、今論者が主題とする錢謙益と歸莊との関係はどのようになるであろうか。

一六四五年乙酉の変に、四月末の揚州の陥落時、歸莊の仲兄爾徳は戦死する。五月十五日の南京落城後、錢謙益は拉致されて北京に到り、清朝の禮部侍郎としての官吏生活、おそらくは失意の數カ月を過ごす。一方、南京落城後の江南では、清軍の漢人に対する辮髮の強制を機に、各都市に抗清闘争が勃発する。歸莊・顧炎武の郷里崑山に於いても、一旦県丞の閻茂才が清軍に降伏し、六月に薙髮令を下すと、それを聞いた人民が憤激し、閻を殺す。「崑山新合志」によれば、

順治乙酉六月、縣丞閻茂才令事を撰り、薙髮令を下す。士民從はずして、縣を諫がし、茂才を繫へ、莊は衆に白して之を殺さしむ。

と記され、歸莊自身も「自ら僞官の首を斬り、因りて世の指名と爲る」(避亂投浮佛寺、寺僧觀公、余族兄也、故住依之)と詠ふごとく閻茂才殺害の主謀者であった。崑山の人々、顧炎武・歸莊・楊永言・吳其沆等は王永祚を主將とする軍に参加して闘う。この時、長興を死守せんとした戦闘に参加した歸莊の叔兄繼登は三十九歳で戦死(六月十三日)した。その後、抵抗も虚しく、七月六日崑山、十四日常熟、八月二十一日江陰と、つぎつぎに各地の都市が陥落していった。歸莊はすでに、兄二人、昭と繼登を失っているが、崑山落城の時には、仲兄の妻、「二嫂」陸氏は、二女をかかえたまま清兵から受けた傷がもとで死ぬ(哭二嫂四首。權厝二嫂挽詞一章)。また叔兄繼登の妻「三嫂」張氏も一男三女のある身で死ぬ。生き残ったのは、その一人息子の婦侃だけである(城陷後二十日、訪得兒子益孫所在、抱之以歸、口占四絶句)。彼らが死んでも、逃亡の身の歸莊は葬式もしてやれず、ただ殯をしてやれるだけであった。歸莊はその悲惨な状況を、哭しながら記している。

七月甲寅、虜崑山を攻む。両嫂及び諸兒女は皆城中に在り。奴輩、間に乗じて縋たらしなわして出づるを勸むるも、從はずして、「城破らるれば則ち火を縦はなちて自焚せん」と相ひ戒む。一奴、詭り進みて曰く、「虜今西門を攻め且に

破らんとし、主家の其の衝に當るに、虜即ち先ず突入すれば、死に及ばざるを懼る。許墓塘に庵有り、尼と主母とは故有り、往くべし。庵の後に池有り。倉卒として急有らば、其の中に投ずれば便なり。」と。其の意は庵の北門に近きを以て、即し城守られざれば、掖えきけて出だすべきなり。翌日乙卯、味爽に相ひ率ひて之に就く。日未だ中せずして城陷ち、奴輩急ぎ北門より出づるを請ふに、両嫂固より肯せず。諸奴は遂に之れを捨て去る。是の日虜は庵中を略し、二嫂以下或いは死し或いは掠せられ、三嫂は跳びて池中に入るも、水浅くして死せず。越へて三日丁巳、賊索め得て、執りて以て去らんと欲するも、之れを拒み、遂に害に遇へり。越えて四日庚申、虜去り、始めて凶問を聞く。余既に位を爲り哭し畢はり、翌日辛酉、遂に匍匐して往く。時に城中横屍載道し、率ね凶禮を成す能はず、棺も給せざれば、則ち之に衣するに薪を以てして之を焚く。余既に倉卒にして棺を具ふ能はず、又其の久しく骸を暴すを忍びず、姑く之を拵ひて以て殯を待たんと欲し、乃ち蒼頭に命じて鍤を荷ひ以て從はしむ。途中首を擧げ遙かに望めば、則ち膺を搏ちて痛哭し、魂魄顛倒し、足を失ひて水に墮ち、諸奴共に之を出だし、乃ち命じて先行せしむ。余歸りて衣を易え復た往けば、則ち鍤を荷ふ者の還るに遇ひ、顰蹙して告げて曰く、「體已に腐し、若し之れを掩はば、他日更に見るに忍びず。已に俗に従ひて之を火にせり。」と。之れが爲に號慟し、乃ち往きて餘燼を收む。時に僞官方に民を勅して剃髮せしむれば、急ぎ走り出で、未だ安んじて膺おくに及ばざるなり。是より邑を擧げて被髮せり。余は猶ほ華の俗に従へば、復た入城する能はず。乃ち八月甲申を以て、二僕に命じ骸骨を取りて南街の故宅に歸せしめ、他の虞れ有らんを懼れ、中霤を掘りて之をか權りにう瘞む。哀情申ぶる莫く、之れを哭するに詩を以てす。(遣人入城權瘞三嫂、遥哭三章有序)

活に身を挺して落ち延びる。その逃亡の途上に、又た父文休を失った。

この後より、歸莊の放浪が始まるのであるが、三年後には、長興まで赴き、兄爾復の遺骨を収集して歸り、相次い

で亡くなった祖父・父母兄弟、三世七人を新しく墓に葬らんとした。しかし、墓を作るにもその資金を歸莊は有しなかった。その彼を援助したのが錢謙益である。埋葬を済ませた歸莊は錢氏に対して礼状を書き送っている。

新正に吾が師の序文を得、感激して涕零し、持ちて以て人に示せば、感動せざるは靡し。奔走すること一月、四方の賻布を合して百金を得、襄事の費、計して己に十の七八は得たれば、遂に卜して三月七日を以て、新阡に葬る。三世の枯骸、狐狸の残ふ所と爲るを免るるを得るは、皆先生の一言の力なり。祚明は心に銘じ骨に鏤するに論母く、地下の幽魂に即きて、亦た當に結草の報を效すべし。又た先君子平日の風流文采を念ふに、望を一世に映せども終身淪落し、志展ぶるを得ず、よりにて以て名を後世に垂る所者は、惟だ墓石の文のみ。曾子固嘗つて言へり、「先世を表章するには、必ず道德有り文章を能くする者を待ちて而る後以てに傳ふるに足れり。

故に先大夫の墓銘を以て之れを歐陽公に屬す。」と。吾が師今世の歐陽公に非ざるか。況んや先君子は吾が師と雅に金蘭の契り有りて、永叔の曾致堯と僅かに門牆を推すの誼なる者の若きに非ず。然らば則ち苟くも文章を以て其の親を光寵するを知らざれば則ち已むも、猶ほ文章を以て其の親を光寵するを知らざれば、吾師に向かはずして誰にか告げんや。（上錢牧齋先生書）

この文面には、錢謙益が一筆してくれたおかげで、お墓を作る費用が集まったこと、父文休公の墓誌銘まで書いてくれたことに対する礼が述べられている。そして、歸莊は自分の師である錢謙益を歐陽修とみだてて、稱讚している。この点では、「與某侍郎」の文中で、「閣下の文……則ち竊かに歎じて以爲らく此れ歐陽永叔の文たりと。又閣下本朝に於いて極めて先太僕を推すを見るに、先太僕の文、其の源は固より歐陽氏に出づ、然らば則ち先太僕は歐陽を師とし、閣下は歐陽を師として尚ほ太僕を友とす。」といっていたのと同様に、歸莊が心より師に対して感じたことを記したのである。明清鼎革後、歸莊は生活に困窮しており、先祖の墓を建てることのできたのは、まさしく錢謙益の庇護によるものであった。錢謙益の方でも、歸莊の並々なぬ詩や書面の才を愛惜し、これを養育せんとした心

づもりがあったのである。このようにして、彼らの師弟関係は、明清鼎革後反って深まって行くのである。

錢謙益は、人から儀礼的な壽文をもらうのが嫌いであったが、とりわけ彼が古稀七十歳のときには、その老いの頑固さからか、人が詩文をもって壽するのをみな拒絶したという。ただ、歸莊のものだけは獨り喜んだのである。また今、錢謙益は齡八十にならんとし、歸莊は師の壽序嫌いをも顧り見ず、かえって師に甘える気持で、あえて犯して、その壽序を草した。

先太僕（歸震川）嘗つて言へり：「生辰に壽を爲すは、古に非ざるなり。」と。顧だ世俗之を尚びて廢す能はず、近日に至りて尤も濫ること甚し。尋常無間の人、六七十歳に至れば、必ず廣く詩文を徵し、屏に盈ち軸を累ぬ。是に於いて宜しく詩文を用ひて壽を爲すべきに、反つて之れを峻卻して高しとなすこと、先生の如き者有り。先生辛丑の歳に於いて年八十に登るも、人の詩文を以て壽を爲すを厭ひ、其の從弟に答ふ一書有りて堅く之れを拒めり。期に先んじて之れを刻し世に傳ふるは、蓋し惟だ人の之れに贈るに言を以てするを恐るのみ。其の門人歸莊黙して思ひて曰く、「吾が師や、宜しく壽を爲すべし。之れを壽するは維れ何ぞや。貧者は貨財を以て禮を爲さず、文を舍きては以無きなり。且つ先生年七十の時、亦た嘗つて人の詩古文を以て壽を爲すを拒むも、顧だ莊の作る所の序に於いては獨り喜べり。序は初め便面に書したれば、先生以爲らく剋敵し易しと。冊子を出して命じて之を重録せしむ。安んぞ知らん今日之を壽するに文を以てするは、仍ほ先生の歡を得ざらんか。」と。因りて先生の其の弟に答ふる書を取り、反覆誦玩す。笑ひて曰く、「吾は先生を壽する所以を知れり。」と。先生の文に云ふ「我を祝する者は、我を詛ふなり。我を頌する者、我を罵るなり。」と。吾今は則ち詛ひを以て祝と爲し、罵りを以て頌と爲さん。……先生人の壽文を爲すを拒むを以て、故に文を以て獻と爲すと雖ども尋常の壽序の辞を用ひずと云ふ。（某先生八十壽序）

これを読めば、錢謙益と歸莊の關係が、普通の師弟關係を越えて、より親密な友情に近いものになっているのが察

せられる。それは錢謙益から歸莊に贈られた詩、「贈歸玄恭八十二韻戲效玄恭體」の冒頭と末尾の句を読むことから
もそれに気付く。

衰老寡朋舊 衰老して朋舊寡きも

最愛玄恭子 最も愛す 玄恭子

玄恭亦昵余 玄恭も亦た余に昵み

不以老髦鄙 老髦を以て鄙しとせず

……………

我年八十一 我は年八十一

子亦五十矣 子も亦た五十なり

そして、この師弟を越えた友情は、錢謙益の死まで持続するのみならず、師から「家学」（歸有光の文学）を守るべきことを知らされた歸莊は、錢氏の死後、歸震川の全集出版を自分の生涯の仕事としたのである。

先生一代に於いて首めに先太僕公を推すも、太僕の文は、初め同時の盛名の者の庄する所と爲りて大いには顯はれず。先生力を極めて表章し、忽然として雲霧廓清し、白日は空に當たれり。小子某、始めや昧昧たるも、及門の後、薰炙陶鑄されて、始めて家学の當に守るべきを知りて夫の妄庸たるを痛懲す。（祭錢牧齋先生文）

尚、歸有光の後継としては、歸莊も錢謙益について「嘉定の文派は、故より太僕を宗とす。而して虞山錢宗伯は、太僕の功臣なり。」（候研徳文集序）と明らかに述べており、又、錢謙益から「汝の曾祖の文章、唐宋八家に継ぐべし。」といわれ、その出版事業はもう年老いた私では無理なのだから、「他日、汝輩の事なり。」（書先太僕全集後）と教えられたように、歸有光全集の刊行事業は、歸莊自身にとってまさにその師から継承したものである。それ故、佐藤一郎（15）氏が「錢謙益が康熙三年（一六六一）に世を去ってから、莊の心には有光の正系を以て任ずる気持が強まったのでは

ないかとおもわれる。」と指摘するのは当然ではあるが、しかし同氏が「康熙六年（一六六七・歸莊が）執筆の『書先太僕全集』では、なぜか順治十七年（一六六〇）に、正集三十卷別集十卷を刊行した際の、錢謙益の功績については、ほとんど触れていない。錢謙益の『新刻震川先生文集序』（一六六〇）を見れば、これまた四部叢刊本の序と同文であるが、かれが順治十七年本で果した役割は明かである。もっとも、歸莊がその刊行の中心となり、全く無視したわけではないが、かれ自身が刊行に当たってもっとも力があつたことを、とくに強調する意図があつたのではなからうか？」と述べるのは行き過ぎであり、歸莊にはそのような「意図」を認めることはできない。何故ならば、すでに論者が引用して述べたごとく、「祭錢牧齋先生文」「侯研德文集序」「書先太僕全集後」は、すべて錢氏の死後歸莊が草した文章で、文中には三篇ともに錢氏の歸有光繼承の功績また錢謙益から受けた全集刊行の啓発を歸莊自から記しているからである。さらに、一六七〇年に作つた「震川先生文集凡例五則」には、「一、編次：錢宗伯所編集三十卷、首經解、末書。又別集十卷、首制辭、末論策。今大概因之。」と、明確に錢氏が歸震川の文集を刊行したことを紹介しているからである。

四

歸莊の錢謙益に対する関係は、先祖歸震川の全集を出版するという共通の文学的な目的のために、歸莊の父歸昌世と錢氏との交友をも引き継いで、生涯にわたって深い友情に支えられた師弟関係であつたと言えよう。錢謙益の死後、歸震川全集の刊行には歸莊がその中心となつて當つた。歸莊の存命中には、全集の刊行は間に合わなかつたが、歸莊の死の二年後康熙十四年に出版されたその巻頭には、「曾孫莊較勸・虞山後學錢謙益選定・玄孫玠編輯」とある。また、歸震川全集⁽¹⁶⁾の凡例は、錢謙益の凡例一（一六六〇年版の凡例）と歸莊の凡例二との両者を掲げており、今そ

の二つを比較してみても、歸莊がその師錢謙益のものを踏襲したことは、明らかである。錢謙益は「經解を以て首となし、次は序論議説、皆議論の文なり。……右編次震川先生文集三十卷、別集十卷、餘集不分卷」とするのを、歸莊は受けている。

一、編次：家蔵の舊本集三十卷は經解を首とし書を末にす。又別集十卷は制辭を首とし論策を末にす。今大槩之れに因る。獨だ以爲らく古人の文集、書は多く前に在れば、當に之れを末卷に置くべからずと。今移して書三卷を贈送序の前に置き、祭文を以て末卷と爲す。……

「書三卷」の位置を移すなど、少しく異同はあるが、卷立てや体裁は、錢謙益がすでに一六六〇年に刊行したものを、歸莊は大概引き継いだと言える。この歸震川全集の刊行に於いて、まず錢謙益から歸莊への文学的師承が認められるといえよう。

さて、歸莊の文学の主張の面でも、錢謙益からの師承が、以下追究するごとく、多分に認められる。前章に於いて、錢謙益が壽序壽詩を拒絶していたという歸莊の「某先生八十壽序」を引用した。その錢氏の壽序嫌悪は、そのまま歸莊の文学の主張ともなる。その「謝壽詩説」に於いて次のごとく述べている。

歲月流るるが如く、年齒漸く邁き、書を讀み道を学び、日々に給するに暇あらず。一事を吟咏するに、白日を費し、心神を耗やすこと少なからず。今縦いままにして戒む能はず。惟だ是れ襟懷を陶寫し、情愔を披陳するのみならば作有るを妨げず。無益の應酬、不情の篇什に至りては、則ち槩ね謝絶に従ふ。壽詩一端の如きは、此れ其の甚しき者なり。……錢宗伯余の爲に言へり、「應酬給する能はざるに苦しみ、嘗に胡元瑞（應麟）の集を案頭に置いて、其の稍や近似する者を選びて移して之れを用ふ。其の活套する者の多きを以てなるのみ。」と。蓋し壽する所の人、既に稱すべきこと無くして、求むる者又た多く、之れを索めて又た迫り、勢ひ容に苟且より出でざるべからず。豈に惟だ宗伯のみならんや、今の詩人亦た多く此の法を用ふ。此くの如く玩侮して、詩は尚ほ

重ずるに足るか。而るに之を得る者、猶ほ以為へらく此れ某先達、某名士の詩にして之れを珍とするなり。亦た愚かならずや。余既に自ら其の精神を惜しみ、其の歳月を愛しみて、又た苟且の事を爲すを欲せず。

文壇の大御所である錢謙益ほどの文人ともなると、人から頼まれれば附合でも文章を草さねばならない。そのいい例が、壽詩、壽序である。彼ほどの文章家でも、その文章の源泉には限りがあり、彼もやはり、壽序の文章を作るためのタネ本を机上に備えていることを、そのごく親しい弟子に漏らしたのである。そして、弟子歸莊は、師である錢謙益が、そうした文章を作るのを何よりも嫌悪し、他人が寄せて来る壽詩、壽序をすべて拒絶した師の文学者としての精神を痛感したのである。それ故、歸莊も、この「壽詩を謝するの説」を草したのである。

さて、以上考察して来たところの錢謙益からの師承が、歸莊の文学思想の中にどのような影響を及ぼしているのだろうか。歸莊は若くして復社に入り、その同盟者として「経世致用」の学を志したのであるが、その面からいえば、彼は本来復古的な載道主義的な文学思想の持ち主であった。それは、また錢謙益門下となる以前、すなわち明清鼎革以前の師であった黄淳耀（一六四五）の文集のために作った序によって判明する。

嘉定黄蘊生先生殉難後九年、……立言之士、必ず瓌異卓絶の才有り、雅馴正大の體を得て、而して又議論は名教に関わり、意旨聖賢に合し、然る後以て世に名ありて後に傳ふべし。此くの若き者、固より已に難し。然り而して文章の道未だ盡きざるや、蓋し本源の焉に在ること有ればなり。立德は、立言の本源なり。苟しくも但だ工を文辭に求むるのみにして、立德を思はざれば、其の行事を考ふるに、文辭と相ひ似ざる者有りて、下筆の語の天下に妙たりと雖も、文人に過ぎざるのみ、君子責はざるなり。……文章は則ち道を載す^{ゆえん}にして、區區雕蟲繡^ひの爲と異なる。（黄蘊生先生文集序）

因みに、黄淳耀は、南都が亡び、また嘉定も陥落するに及んで、その弟淵耀と西城の僧舎に縊死した節操の士である。尚、この序文にみる歸莊の文学思想は、「一たび号せられて文人と爲らば、觀るに足る無し」と主張する顧炎武

と軌を一にするものであろう。さらに付言すれば、この文章、冒頭に「黄蘊生先生殉難後九年」と記されるので、今に残る歸莊の序文の類としては一六五〇年代中ごろの作で、比較的早い時期のものである。ここには、まだ錢謙益の影響は全くみられない。次に掲げる「天啓崇禎兩朝遺詩序」もまだ一六五〇年代のものであり、載道主義文学の詩の方面における主張として直線的詩論である。

傳に曰く、「詩は志を言ふ」と。又曰く、「詩は以て性情を道ふ」と。古人の詩、未だ其の志と其の性情に本づかざるもの有らざるなり。故に其の詩を読めば、以て其の人を知るべし。後世の人多く偽を作し、是に於いて情と志を離れて詩を爲る者有り。情と志を離れて詩を爲らば、則ち詩は以て其の人の賢否を定むるに足らず。故に、當に先ず其の人を論じて、後其の詩を觀るべし。夫れ詩は既に其の人を論じ、苟しくも其の人取るに足る無ければ、詩は必ずしも多くは存せざるなり。陸機身を逆藩に失ひ、潘岳は賊后おもねに黨り、沈約は梁武をして故君を弑せしむるに、昭明其の詩の工なるを以て、之れを選すること特に多し。王維・儲光羲は祿山の僞命に汙れ、皮日休は黄巢の官を受くるも、唐詩を選する者は、願って津津として置かず。詩を論ずることに精しくして人を論ずることに略なる、此れ古今の文人の通蔽なり。

この序に見える歸莊の詩論は簡明直截であつて、それは、詩を選定するのは詩そのものよりも、その作者の人となりを觀ることが大切だということである。「歸莊集」では、この「天啓崇禎兩朝遺詩序」の次に配される次の「呉余常詩稿序」も、そうした直線的な詩論を有していた青年歸莊の文学思想を窺うことができる。

太史公言へり、「詩三百篇、大抵聖賢發憤の作なり。」と。韓昌黎言へり、「愁思の聲は要妙なり、窮苦の言は好くし易し。」と。歐陽公亦た云へり、「詩は窮して後に工みなり。」と。故に古より詩人の傳ふる者、率ね逐臣驥客、世に遇はざるの士多し。吾以爲らく、一身の遭逢は、其の小なる者なり、蓋し亦た國家の運に視ぶればなり。詩家は前には七子を稱へ、後には杜陵を稱へて、後世其の倫比無し。使し七子の建安の多難に當らず、杜陵の

天寶以後の乱に遭はざれば、盜賊羣起し、攘竊割據し、宗社^{げつこつ}艱^い難^き 民生塗炭にして、即ち中に慨^{きだほ}ることあるも、未だ必ずしも其の能く寄託深遠、人心を感動し、讀者をして流連已まざること此くの如くならじ。然らば則ち、士は才ありと雖も、必ず小なる不幸にして身は阨窮に處り、大なる不幸して危亂の世に際し、然る後其の詩は乃ち工みなり。……然れども古に稱す、三不朽は立言を下と爲すと。使^もし其身と名と俱^{やずら}に泰^{やすら}かにして、徳高く功顕はるれば、尚ほ何ぞ雕蟲の技を取ることを爲さんや。況んや又國家の治亂安危を視て以て工拙を爲す者をや。吾蓋し日々其の詩の工みなるを懼る。

この「詩序」には、司馬遷の「発憤著書」の説、韓愈の「愁思之聲要妙、窮苦之言易好」と歐陽脩の「詩窮而後工」の古来しばしば引かれて有名な言葉を根據にして、歸莊は「詩の道」をあたかも会得したごとく、載道主義的文学觀に立つて詩を論じている。しかも詩文すなわち詩と散文を区別することなく、顧炎武の「文須有益於天下」の主張と同じ色合である。

ところが、顧炎武も北游（二六五七）して江南を離れ、歸莊ら盟友も、清朝の権力が四方に浸透しその支配体制が固定してくるにしたがつて、この江南の地では抵抗も出来ない諦念せざるをえず、その後、彼ら盟友は文学に没入するより仕方がなかったのである。歸莊について言えば、顧炎武ほどに経世の才と資産があるわけではなく、⁽¹⁷⁾その日を糊口するのにも困難な情況が生じていたわけであり、書面を売り、衣を典して暮したのである。また弟子として錢謙益の門に入り、色々の援助も受けたようである。また歸莊の作品の面からいえば、顧炎武が北に去つてのち、とりわけ一六六〇年代以降、「看花」の作、游記の類が顯著に増加するのである。歸莊の文学のあり方も變化して来たといえよう。

余嘗つて作詩と古文と同じからざるを論ず。古文は必ず静氣凝神、深思精擇して之を出だす。是の故に宜しく深室に獨り坐すべし、宜しく静夜なるべし、宜しく香を焚き、茗を啜るべし。詩は則ち然らず。本もと性情を娛しましむるを以て、將に興会を待つこと有らんとす。夫れ興会には、則ち深室は山に登り水に臨むに如かず、静夜

は良辰吉日に如かず、獨坐焚香嚼茗は高朋勝友と觥を飛ばし痛飲するの勸暢を爲すに如かざるなり。是に於て、分韻刻燭、奇を争ひ捷を闘ひ、豪氣狂才、高懷深致、錯出して並び見わるれば、其の詩必ず觀るべき有らん。

……江文通言へり、「僕本より恨人なり。」と。余無窮の恨有りて、中に鬱積し、多く之を詩に発す。然れども唱和するに人無くして、戸を閉じて獨吟するのみ。(呉門晶和詩序)

この「序」では、文と詩とを區別して、緻密に述べられ、詩については以前には主張しなかつた、その娛しみが述べられてゐる。また詩は、自分の「無窮の恨」の捌口としてゐるが、以前の調子の高い詩論ではなくなつてゐるといえよう。詩についても、錢謙益について学んだり、自らも思索したあとが、この頃すでに一六六〇年代半ばに草された「詩序」の中に、多々見うけられる。「詩は作るに易からず、亦た知るに易からず、能く知りて然る後能く作る。」(許更生詩序)や、「古人の作、大抵學問性情より出で、是れを舍きては詩無し。」(顧伊人詩序)などの發言がその例であり、錢謙益の文學批評を繼承することが、かなり顯著になるように思われる。

五

「余は花に於いて愛せざる無し。」(尋菊記)、「余素より花を愛す。」(看牡丹記)や「余性山水を好み、毎に四方に遊ぶ。」(書虎丘詩卷後)と述べるごとく、花を愛し山水を愛した晩年の歸莊には、今論者が名付けて「景情合致論」と呼ぶべきものがある。

情と景と合して詩有り。廊廟には廊廟の情景有り、江湖には江湖の情景有り、緇衣黃冠には緇衣黃冠の情景有り。情真にして景真なれば、従りて之を詠歌に形し、其の詞必ず工みなり。(眉照上人詩序)

この歸莊の「景情合致論」は、まさしく錢謙益の「古の詩を爲る者は、必ず深情は内に蓄積し、奇遇は外に薄射す

る有り、……而して其の詩も亦た工みならざるを得ず。」（虞山詩約序 初学集卷三十二）、「以謂へらく古人の詩は、奇正濃淡、萬有して齊しからざるも、要するに其の中を空しくして腹に滿ち、隙に遇うて発現するは則ち一なり。」（華間修詩草序 初学集卷三十二）や「詩なる者は志の之く所なり。性靈を陶冶し、景物に流連して、各々其の言はんと欲する所の者を言ふのみ。」（范蠡卿詩集序 初学集卷三十一）に據るのではないかと考えられる。ここに列擧した錢謙益の詩論を踏まえて、歸莊は端的に「情と景と合して詩有り。」と主張したのである。また、歸莊は詩について次のごとく、論じている。

余嘗つて詩を論じて、氣・格・聲・華、四者一つを缺けば不可なりと。之れを人に譬へば、氣は猶ほ人の氣のごとく、人の頼りて以て生くる所の者なり、一肢貫かざれば則ち死肌と成り、全體貫かざれば、形神離る。格は人の五官四體の如し。定位有りて、易ふべからず、位を易ふれば則ち人に非ず。聲は人の音吐及び珩璜琺瑯の節の如し。華は人の威儀及び衣裳冠履の飾の如し。（玉山詩集序）

ここでは、詩を人に譬えて歸莊は論じるが、その論據の発想も錢謙益の詩論に存するようである。錢氏は「邵幼青詩草序」（初学集卷三十二）で述べている。

余曰く、古に「詩人は、其の詩を人にせずして、其の人を詩にす」と云ふ者は何ぞや。其の詩を人にすれば、則ち其の人と其の詩と二なり。……其の人を詩にすれば、則ち其の人の性情、詩なり。形状、詩なり。衣冠笑語、一として詩に非ざるは無きなり。

歸莊は、錢氏のこの主張や、「文章聲律は、文人志士の雲氣なり。」（梅仙族孫詩序 有学集卷二十）「以爲へらく詩の篇章聲律、奇正濃淡有るは、皆な其の體魄なり。氣有り。心識に含藏し、行墨に涌見す。」（黃庭表忍菴詩序 有学集卷二十）に見える錢氏の「氣」の論を念頭に置いていたのではないか。歸莊の詩論には、錢謙益を継承する部分が認められ、それは以前の載道主義に沿った文学の主張から、晩年の「尋花日記」など「花の文学」の作者として、より

文人的な柔軟な文学の主張をするように変化する。その点は、歸莊が草した詩文の実作の上でも検証できることで、次の機会で論じたいと思う。

最後に、吳偉業に対する錢謙益と歸莊の評価がほとんど一致すること、おそらくはその吳偉業評価も歸莊が継承している点について述べる。錢謙益は「吳梅村先生詩集序」(有学集卷十七)において、吳偉業の詩を高く評価し、「錢の詩論の結論¹⁸⁾とみなされる詩論を開陳している。また歸莊は、錢謙益の死後、吳偉業に対して「虞山(錢謙益)既に歿し、能く其の路に由り、其の域を踐み、其の疆を拓く者、惟だ我が梅村先生のみ。」(吳梅村先生六十壽序)と断言してはばからないのも、歸莊が直接その師錢氏から吳偉業の評価を承受したからにほかならない。

詩の道言ひ難し。……大抵常を厭ふ者は異を立つるを取り、後起の者は前人を排し、終に定論なし。近世錢宗伯始めて之れが爲めに榛莽を除き、徑の寶を塞ぐ。然る後詩家始めて正道に趨き、之れを大雅に還すを知れり。而して吳司成(偉業)又其の矯枉過正なるを慮り、復た従りて之れを折衷し、後の詩を論ずる者、易ふ能はざるなり。……又嘗つて宗伯に司成の緒論を聞けり、「是に於いて下筆千言、珠璣錯落せり。五言長篇、白太傅に類る有り。七律時に劉隨州に似る。七古綺麗流美にして、往往初唐に入らんと欲す。所謂各各一派を宗とし、争ひて一説を持する者に於いて、殆ど其の長を兼ねて其の病無く、居然として風雅の名家たり。」と。昌黎・廬陵の詩を論じて、以爲へらく「窮して而して後工みなり。」と。蓋し獨だ孟東野・蘇子美の輩のみ然りと爲さず、其の言今に至るまで尤も驗あり。(王異公詩序)

ここで再び、歸莊は「詩窮而後工」を引いて、錢謙益に據りながらも、吳偉業こそまさにその「驗」であるとしている。歸莊が再三にわたり歐陽修の「詩窮而後工」の語を引くのは、一つには青年時代からの載道主義的文学観にもよるが、さらには、この「詩窮而後工」を引用して、その師錢謙益が主張する「詩には不均衡なカオスの成果である¹⁹⁾」とする考え方を継承したからであろう。

古の詩を爲る者は、必ず獨至の性、旁出の情、偏詣の学、輪困偪塞、偃蹇排異、人は解する能はず、己すら自から喩らざる者有りて、然る後に其の人始めて能く詩を爲る。而して之れを爲りて必ず工みなり。……人の趨く所は、詩人の畏るる所。人の憎む所は、詩人の愛する所。人は譽めて而して詩人は以て憂ひと爲し、人は怒りて而して詩人は以て喜びと爲す。故に曰く、「詩は窮して後に工みなり」と。詩の必ず窮し、而して之を窮して必ず工みなるは、其の理然るなり。(錢謙益「馮定遠詩序」初学集卷三十二)

まさしく吳偉業は、明朝が北京で滅んだとき臣節を全うせんとして死を謀ったが果さず、明清鼎革の後、迫られて出仕し武臣となつたわずか二年を、生涯の過誤として、憂悶の中で、滅亡した先朝を哀しみ、帰らぬ過去に傷心しながら、詩作し死んで逝つた詩人なのである。明清鼎革の際に、「詩窮而後工」の典型的詩人であると、錢謙益と歸莊の師弟共々みなしたのである。先に引用した歸莊の吳偉業についての評価は、まさしく錢謙益からの師承であるといえよう。

以上要するに、「歸有光全集」の刊行事業の継承のみならず、歸莊の文学思想とりわけその詩論に於いて、錢謙益の影響が色濃く認められるのである。そして、歸莊はその影響によって、前半生の載道主義の直線の文学観から、後半生において「花の文学」のごとく、より多彩多様な文学創作をするに至り、その面でも高く評価されることになるのである。⁽²⁰⁾

註

- (1) A. W. HUMMEL (ed.): EMINENT CHINESE of the CH'ING PERIOD. (清代名人傳略 一九四三) 四二七頁。
- (2) 『歸莊集』上・下 (新華書店上海發行所 一九六二) の冒頭に付す中華書局上海編輯所の「出版説明」。
- (3) 顧炎武『日知錄』卷十九「文人之多」中に引く宋の劉摯の語。
- (4) 顧炎武『日知錄』卷十九「文須有益於天下」。

- (5) 管見の及ぶところ、鈴木虎雄「歸元恭の萬古愁曲」(『支那文学研究』所収)をみるだけである。
- (6) 謝国楨氏著『明清之際党社運動考』(台湾商務印書館人文庫版)一六三頁に據る。
- (7) 朱彝尊輯『明詩綜』卷七六。
- (8) 錢謙益については、吉川幸次郎「錢謙益と東林」(日本中國學會報第十一集)・「居士としての錢謙益」(福井博士頌壽記念東洋思想論集)・「錢謙益と清朝經學」(京都大学文学部研究紀要九、以上いずれも『吉川幸次郎全集』第十六卷所収)・「文學批評家としての錢謙益」(中國文學報第三十一冊)と青木正兒『清代文學評論史』第一章清初の反擬古運動を参照。

- (9) 岩城秀夫氏著『中國戯曲演劇研究』六五頁。
- (10) 吉川幸次郎「錢謙益と清朝經學」。
- (11) 同治元年版(重修)『蘇州府志』卷九十四。
- (12) また錢謙益は「歸文休七十序」(初學集卷四十)も草した。
- (13) 鄧之誠撰『清詩紀事初編』上・下冊(中華書局香港分局)卷一。
- (14) 趙經達編輯「歸玄恭先生生年譜」(『歸莊集』附録)に據る。
- (15) 佐藤一郎氏「歸有光の系譜」(芸文研究二〇)。
- (16) 歸震川集の定本としては、四部叢刊本が挙げられるが、ここでは香港廣智書局出版『歸震川全集』の単行本を例として挙げた。これも、巻頭に「明史文苑傳」を附してはいるが、四部叢刊本を襲っている。ただ、叢刊本では錢謙益の「凡例一」を序として掲げ、歸莊の「凡例二」は「凡例五則」の題目で列挙する。
- (17) 拙稿「顧炎武の詩における孤高の形象」(日本中國學會報第三十二集)を参照されたい。
- (18) 吉川幸次郎「文學批評家としての錢謙益」(中國文學報第三十一冊)。
- (19) 同前。吉川氏は、「この理論は、中國の批評家の中にしばしば見えるものではない。」と指摘する。
- (20) 例えば朱震・阮无名編『日記文學甲選』・『宋元明日記選』(太平洋圖書公司 一九五七)には歸莊「尋花日記」として、「看牡丹記」・「尋菊記」・「省寒花記」が選せられている。

※ 歸莊の詩文の引用は、『歸莊集』上・下(新華書店上海發行所 一九六二)、錢謙益の引用は四部叢刊本『牧齋初學集』

・『牧齋有學集』に據る。